Ⅳ 第3期ビジョンのめざす姿

1 基本的な考え方・基本目標

（1）位置づけ及び計画期間

第3期ビジョンは、「21世紀兵庫長期ビジョン」の趣旨や方向性を踏まえ、県の芸術文化振興のための取り組みの展開方向を示す指針とするとともに、文化芸術基本法第7条の2に定める地方文化芸術推進基本計画として位置付ける。

なお、計画期間は2021（令和3）年～2025（令和7）年までの5か年とする。

（2）基本目標

芸術文化立県ひょうご

～芸術文化で人や地域を元気にし、未来を開く社会の実現～

芸術文化は、暮らしの中で人々を癒やし、明日への希望や生きる勇気をもたらすものであるとともに、想像力や感情移入の能力、表現力といった、豊かな人生を生きていく上で不可欠な能力を育む糧となっている。

また、芸術文化は、地域の個性（アイデンティティ）を形成する核となり、地域コミュニティの一体感や連帯感を醸成するとともに、相互理解や共生といった絆の基盤ともなり、寛容の心の醸成や世界平和への貢献といった意義も担っている。さらに、21世紀の成熟社会にふさわしい産業の振興や、既存産業の高付加価値化にもつながる可能性も秘めている。

われわれ兵庫県民は、阪神・淡路大震災や新型コロナウイルス感染症の拡大といった厳しい環境のもと、こうした芸術文化の機能を再認識することとなった。

こうしたことから、第3期芸術文化振興ビジョンにおいては、第1期・第2期ビジョンに引き続き、芸術文化が社会の中で果たす役割の重要性を深く自覚しつつ、ポストコロナの新しい社会を見据え、芸術文化で人や地域を元気にし、未来への展望を切り開く社会の実現をめざす「芸術文化立県ひょうご」を基本目標として、県民・団体などの自主性・創造性を尊重し、その参画と協働のもとに、積極的な芸術文化振興方策を展開していく。

2 基本方向

基本目標である「芸術文化立県ひょうご」の実現を目指し、以下の5つの基本方向に沿って、芸術文化振興方策を展開する。

（1）芸術文化を創造・発信する

芸術文化立県をめざすためには、全国的・国際的に評価される優れた芸術文化の創造・発信拠点としての兵庫を確立していかなければならない。

そのためには、県民が自ら行う芸術文化活動を幅広く支援し、芸術文化を実践する層の拡大を図るとともに、本県から優れた芸術家を育て、その活動・活躍の場を拡げる。

また、芸術文化の発信・交流拠点としての芸術文化施設の活性化を図るとともに、コロナに負けない安全で安心な活動ができるよう環境整備を支援する。同時に、芸術家を施設や地域、県民や団体等と結びつけ、新しい芸術文化事業を企画・運営する芸術文化プロデューサーや、人と人とを結びつけるコーディネーター等の専門人材を育てていく。

さらに、海外との交流が困難となっている状況下において、本県の芸術文化を全国、海外へとアピールするため、ICT等新たな技術を活用した情報発信力の強化に重点的に取り組む。

（2）芸術文化の“場”を育て拡げる

芸術文化立県をめざすためには、プロの芸術家や芸術文化団体だけでなく、一般の県民や団体等が芸術文化の創作・実践や鑑賞活動を行うことができる“場”を育て拡げることにより、鑑賞機会の地域偏在解消や本県の芸術文化のすそ野を拡大していかなければならない。

「芸術の“場”」としては、芸術文化施設以外に、地域の公民館や空き店舗、廃校施設や空き教室、公共施設のロビー、駅前広場の活用等に加え、新たに演奏動画配信等ICTを活用した活動の“場”づくりにも取り組んでいく。

こういった地域における多彩な活動の場を活用して兵庫芸術文化センター管弦楽団やピッコロ劇団に加え、県域文化団体や各地域の芸術家にも協力を得ながら、本物の芸術を体験するアウトリーチ活動のほか、動画配信等による体験機会の提供により、県民が地域で身近に芸術文化に親しむ場づくりに重点的に取り組む。

また、平成30年に障害者文化芸術活動推進法が制定されるなど、高齢者や障害者、在留外国人等あらゆる人々が共生できる社会の実現に向け、社会包摂の機能を備えた芸術文化に求められる役割は大きくなっている。そのため、障害者等による芸術文化の鑑賞や創造、発表機会の拡大に向けた取組の充実を図る。

そして、新たな時代に対応した芸術文化人材の育成のため、幼少期から芸術文化に親しむ環境づくりとして、学校や地域と連携し、子どもたちが身近な場で幅広い芸術文化を体験できる機会を確保するとともに、本物の芸術文化に触れる機会を提供していく。

(3) 文化力を高め、地域づくりに活かす

芸術文化立県をめざすためには、県民の暮らしや地域の中に芸術文化が息づくとともに、芸術文化を通じて人々の創造性を高め、新たに魅力的な文化が創造され社会的・経済的な新しい活用法が生まれるよう、県民や地域が持つ文化力を高めることが必要である。

そのためには、地域に視野を広げ、兵庫五国の多彩で特色のある文化資源や伝統芸能等、地域の「宝」である歴史文化遺産を見直し再評価することにより、愛着と誇りを持つ「ふるさと意識」の醸成を図り兵庫の文化の継承・発展に取り組むとともに、交流人口の増加や地域活性化につなげる。

そして、芸術家の発想を活用し、産業の高付加価値化を進める。また、掘り起こされた文化資源の戦略的な活用を図ることにより、芸術文化を活用したツーリズム振興等、観光分野との連携強化を図る。さらに、今後の事業展開が期待されるICTを利用した芸術文化活動やメディア芸術等も活用し、産業振興と結びつける取組を支援していく。

(4) みんなで支え、総合的に取り組む

芸術文化立県をめざすためには、県行政だけでなく芸術家や芸術文化団体はもちろんのこと、県民や団体、企業、市町等幅広い主体の参画と協働が不可欠である。

そのためには、県行政、県民、芸術家や芸術文化団体に加え、国、関西広域連合、市町、芸術文化施設、企業、学校、NPO法人、文化ボランティアなどの多様な関係機関等によるプラットフォームを形成し、各主体が各々の役割を認識し県の芸術文化の推進に向け連携・協働を図る。

また、県民自らが芸術家を支え育てる目を持つ観客として芸術文化に対する見識と理解を深めるとともに、芸術文化団体や、NPO法人等と連携して文化ボランティア等で文化を支える人材として活躍する場を拡げる。

加えて、企業のメセナ活動、ふるさと寄附やクラウドファンディング等による芸術文化振興のための財源等も積極的に活用する。

そして、地域文化の持続的な発展のため、地域の芸術文化を熟知し文化資源と文化施設をつなぐマネジメント力を備え、高いスキルを有する専門的人材の育成・確保を進める。

(5) ポストコロナ社会への対応

新型コロナウイルス感染症の拡大が芸術文化活動にも大きな影響を及ぼす中、ICTを活用したオンライン芸術鑑賞が拡大する一方、舞台公演による生の芸術鑑賞を通して芸術文化に感動する重要性も改めて認識された。ポストコロナ社会に向けては、デジタル革新への対応と本物の芸術文化を生で身近に享受できる環境の両方の充実が求められる。

そのためには、動画配信等新たな創造・発信手法の展開やICT等を活用した多彩な芸術文化情報の発信等を行っていく。また、ガイドラインを踏まえた感染防止対策の徹底と円滑な施設の運営を支援するとともに、地域でのアウトリーチ活動の推進や青少年が芸術文化に親しむ機会を充実させるとともに、災害時における相互連携を支えるプラットフォームの整備を進める。

3 重点取組項目

芸術文化を取り巻く諸情勢の変化と、第2期ビジョンの検証結果、第3期ビジョンの基本方向を踏まえ、今後5年間で、重点的に取り組むべき4項目を設定する。

(1) 芸術文化の創造・発展に向けた人材育成と新たな技術（ICT）の活用

- 芸術文化を担う若手芸術家の発掘・育成を推進する
- 芸術文化活動を支えるプロフェッショナルを確保・育成する
- 動画配信等、ICT等を活用した新たな創造・発信手法を展開する

取組例: ひょうごアーティストサロンによる若手芸術家等への情報提供や発表・交流の場の確保、芸術文化観光専門職大学におけるアートマネージャー等専門人材の育成、動画等を後世に伝えるための情報整理・アーカイブ化、学校の部活動でリモートレッスンにより指導を受ける機会の提供、つながる芸術文化プロジェクト等の若い人の能力や感性を生かした配信事業の支援　等

(2) 県民誰もが身近に本物の芸術文化に親しめる環境の充実

- 芸術文化の活動・鑑賞機会等に関する地域偏在を解消する
- アウトリーチ活動など青少年が本物の芸術文化に親しむ機会を充実する
- 社会包摂の実現に向け、高齢者・障害者・外国人等あらゆる人々の芸術文化活動を積極的に支援する

取組例: 市町ホール活用支援事業等による市町ホールの企画力向上のための取組、県域文化団体による地域の学校・施設への訪問型の公演鑑賞機会の提供、伝統文化ふれあい広場など伝統文化に気軽に触れることができる機会の創出、県域文化団体による伝統文化継承への支援、障害者芸術文化人材バンクによる実地指導・オンライン教室の実施　等

(3) 芸術文化資源を通じた地域の活性化

- 地域活性化に向け文化資源や芸術文化をまちづくり・観光へ活用する
- 地域の優れた芸術文化遺産の発掘・発信により、地域意識(シビックプライド)を育成する

取組例: 鑑賞型から滞在型・体験型へのコンテンツの充実化、日本遺産を活用した観光キャンペーンやバスの運行、アートイベントの地域間連携の強化、芸術文化観光専門職大学「地域リサーチ＆イノベーションセンター」の設置、近代茶室建築を代表する木津宗泉設計茶室の移転整備、学校・地域等での体験事業による伝統文化の普及と伝承への取組　等

(4) 芸術文化を支える連携体制の強化

- 新たな芸術文化拠点整備において地域との連携を推進する
- 県・市町、芸術文化団体、文化施設、民間等の連携を支えるプラットフォームを整備する
- 芸術文化振興のための財源を積極的に確保する

取組例: 市町ホールが連携して公演等を企画する取組への支援、ICTとリアルな場面を組み合わせたプラットフォームの構築、阪神・淡路大震災や新型コロナウイルス感染症など災害等における教訓の収集と活用、ネーミングライツ、ふるさと寄付金、クラウドファンディング等民間資金の活用　等

4 成果指標の設定

第3期芸術文化振興ビジョンにおいては、今後の事業展開にあたって、各取組の正確な検証に基づく実効性を確保するため、成果指標の設定を行う。

第2期ビジョンに引き続き、「21世紀兵庫長期ビジョン」における「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査項目の2指標（下記指標1･4）に、「県民モニターアンケート」の調査項目から2指標（下記指標2･3）を加え、それぞれの調査結果に基づき、一定の数値評価を行うことで、その達成度と事業展開の方向性を見定めていくこととする。

指標1 **「住んでいる市･町で、芸術文化に接する機会があると思う人の割合」**

（兵庫のゆたかさ指標）

→ 令和7年（2025）までに 50% にする。 （現在値）令和2年:37.1%

※成果指標達成のための重点取組項目

1 芸術文化の創造･発展に向けた人材育成と新たな技術（ICT）の活用
2 県民誰もが身近に本物の芸術文化に親しめる環境の充実
3 芸術文化資源を通じた地域の活性化

指標2 **「この1年間に出向いて芸術文化を鑑賞した人の割合」**（県民モニターアンケート）

→ 令和7年（2025）まで 90%以上を維持 する。 （現在値）令和元年:93.5%

※成果指標達成のための重点取組項目

1 芸術文化の創造･発展に向けた人材育成と新たな技術（ICT）の活用
2 県民誰もが身近に本物の芸術文化に親しめる環境の充実

指標3 **「この1年間に芸術文化活動を自ら行った人の割合」**（県民モニターアンケート）

→ 令和7年（2025）までに 55% にする。 （現在値）令和元年:44.7%

※成果指標達成のための重点取組項目

1 芸術文化の創造･発展に向けた人材育成と新たな技術（ICT）の活用
2 県民誰もが身近に本物の芸術文化に親しめる環境の充実

指標4 **「住んでいる市･町で、自慢したい地域の「宝」（風景や産物、文化など）があると思う人の割合」**

（兵庫のゆたかさ指標）

→ 令和7年（2025）までに 65% にする。 （現在値）令和2年:55.0%

※成果指標達成のための重点取組項目

2 県民誰もが身近に本物の芸術文化に親しめる環境の充実
3 芸術文化資源を通じた地域の活性化

Ⅴ 課題と展開方向

1 芸術文化を創造･発信する

（1）芸術文化を担い、育て、つなげる人材を育成する

■ 現 状

○ 県内では従前から若手芸術家の登竜門となるコンクールが数多く開催されており、芸術系大学も多く存在する。県においても、県立高校への芸術系学科の設置、スーパーキッズオーケストラの運営、ピッコロ演劇学校や舞台技術学校の開講、アカデミー機能を有する兵庫芸術文化センター管弦楽団の運営など、若手芸術家を育てる様々な取組が続けられている。こうしたこともあり、本県ゆかりの優れた芸術家が多数輩出されている。

○ 第2期ビジョンの期間中には、若手芸術家に発表の場を提供する「兵庫ゆかりの新進芸術家育成プロジェクト･リサイタルシリーズ」が開始されたほか、若手芸術家を支援する「ひょうごアーティストサロン」の機能拡充が図られた。また、現在、令和3年4月に但馬地域に誕生する芸術文化観光専門職大学の整備が進められている。

■ 課 題

○ コロナ禍等の理由により、若手芸術家の十分な発表の場の確保が困難となっている。また、従来の枠にとらわれない、先進的･前衛的な分野の芸術家をどのように応援していくかについても考えていく必要がある。

○ 習い事の多様化や少子化等の事情により、プロフェッショナルの芸術家として生計を確保することが困難な状況が生じつつある。一方で、AI化などによっても消えることのない、人類にとって普遍的な職業としての価値も高まっている。

○ 芸術家と観客を結ぶプロデューサー的な役割を果たす人材など、芸術文化活動を支えるプロフェッショナルが十分に養成されていない。

■ 展 開 方 向

○ 若手芸術家を発掘･育成するため、引き続きピッコロ劇団や兵庫芸術文化センター管弦楽団を運営するとともに、芸術家が抱えるさまざまな相談への対応や、イベントやコンサートへの出演機会の提供、優れた芸術家の顕彰等に取り組む。

○ 芸術文化観光専門職大学やピッコロ舞台技術学校を核として、プロデューサー、コーディネーター、舞台スタッフ、ホールスタッフ等、芸術文化活動を支える幅広いプロフェッショナルを確保･育成する。また、県立芸術文化センターやピッコロシアターが有する企画制作･施設運営にかかるノウハウ等を、広く県内市町ホールなどに伝える機会を設ける。

○ プロフェッショナルとともに芸術文化活動を支える主体として文化ボランティアを位置づけるとともに、ボランティア自身の資質向上･自己実現を図り、やりがいと生きがいを感じることができるための体制を構築する。

■ 主 な 取 組

①若手芸術家の発掘･育成

・ 兵庫県文化賞等四賞、芸術奨励賞等各種顕彰制度の実施
・ ひょうごアーティストサロンによる芸術家等への情報提供や発表･交流の場の確保

・ 新進・若手芸術家の掘り起こしと支援など、つながる芸術文化プロジェクトの推進
・ 県立高校芸術系学科における若手芸術家の育成
・ ピッコロ演劇学校、ピッコロ舞台技術学校、兵庫芸術文化センター管弦楽団の運営

②芸術文化活動を支えるプロフェッショナルの確保・育成

・ 芸術文化観光専門職大学におけるアートマネージャー等専門人材の育成
・ ピッコロ舞台技術学校における舞台技術者の育成
・ 県立芸術文化センターでのアートマネジメント講座の開催等による芸術文化プロデューサー等の育成
・ 歴史文化遺産の活用を図るヘリテージマネージャー等の人材育成

③文化ボランティアの育成・活用

・ ひょうごボランタリー基金による地域の文化ボランティア活動等への支援
・ 社会教育施設で活躍する文化ボランティアの資質向上

column 兵庫県における若手芸術家の育成

兵庫県においては、県立学校や県立施設等において、さまざまな形で若手芸術家を育てる取組が続けられています。

①県立高校における芸術系学科の設置

兵庫県では、昭和58年、県立西宮高校に音楽科、県立明石高校に美術科を設置。また、昭和60年には、県立宝塚北高校に演劇科を設置。基礎学力を充実させた上で、実習や校外学習を含めた専門的な学習を積み上げ、幅広い教養と専門的な知識・技術の調和がとれた豊かな人間性を涵養するとともに、将来の芸術文化の発展に寄与する人材育成をめざしています。

卒業生は、さらに上級の学校などに進むなどして専門性を生かした分野で活躍しているほか、その芸術的な感性や知識を活かすことができるさまざまな職業に従事しています。

県立西宮高校音楽科

県立明石高校美術科

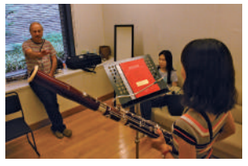
県立宝塚北高校演劇科

②ピッコロ演劇学校・舞台技術学校における俳優・舞台技術者等の育成

兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）では、演劇活動に参加しようとする若者達の夢を支え、地域文化を高めていくために、昭和58年、「ピッコロ演劇学校」を開設。さらに、平成4年には、地域におけるクリエイティブなステージづくりをめざす人材を育成するために「ピッコロ舞台技術学校」を開設しました。いずれも全国の公立文化施設としては初めての試みです。

これまでの卒業生は合わせて約2,800名。プロの俳優・演出家・舞台技術者のほか、地域文化を担うリーダーとして、さまざまな分野で活躍しています。

③兵庫芸術文化センター管弦楽団におけるアカデミー機能



兵庫芸術文化センター管弦楽団は、世界各地でのオーディションで選ばれた若手演奏家で構成される“フレッシュでインターナショナル”なオーケストラです。県立芸術文化センター専属のプロオーケストラの要素とアカデミーの要素を併せ持ち、楽団員は様々な公演でオーケストラ奏者としての経験を積むとともに、国内外のゲストプレイヤーによるマスタークラス、模擬オーディションなどのプログラムにも参加します。

これまで同オーケストラを巣立った楽団員は約220名となり、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、広島交響楽団、フィラデルフィア管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、デトロイト交響楽団、香港フィルハーモニー交響楽団など、国内外の著名オーケストラへ入団し、活躍しています。

column 芸術文化観光専門職大学の開学

令和3年春、兵庫県北部の但馬地域に誕生する、兵庫県立の芸術文化観光専門職大学。

芸術文化と観光分野の2つの視点を生かし、世界につながる新たな価値を創造できる人材を育成します。

国公立では初の、演劇を本格的に学び、実社会を生き抜くコミュニケーション力を修得できる大学です。

■特徴1　芸術文化と観光で地域を元気にするプロフェッショナルに

既存の文化資源の掘り起こしや新たな文化を創出し、それを多彩な観光資源と結びつけることで、新しい事業を創造し地域を元気にする“専門職業人”をめざす。

■特徴2　国公立初！演劇・ダンスの実技が本格的に学べる

1年次に全員が演劇的手法による「コミュニケーション演習」を履修。演劇を活用して表現力や協調性などを身につけ、これからの社会で必須となる「対話的コミュニケーション能力」を養成。

■特徴3　1学部1学科80人の徹底した少人数教育

「芸術文化・観光学部　芸術文化・観光学科」の1学部1学科80人で編成し、原則、全科目を40人以下で行う徹底した少人数教育を実施。教員と学生の顔の見える関係と、きめ細かな指導を通じて学びを深め、高い教育効果を実現。

■特徴4　授業の1/3が実習、教員の半数が実務家

豊富な実務経験のある教員による講義・演習、観光や芸術文化の現場をフィールドにした授業の1/3（800時間以上）の実習を実施。実習を単なる経験にとどめることなく、自らがプランを作成するなど、大学在学中に実践力を養成。

■特徴5　「理論×実践」の新たな学び

学期制は、1学年365日を4期に区分するクォーター制を採用。第1・第3クォーターは講義、演習科目を、第2・第4クォーターは実習科目や集中講義、海外留学を配置。「理論」と「実践」を繰り返すことで、主体的に学びを深化。

■特徴6　劇場等を備えた実習等及び1年生全員が共同生活を行う学生寮の整備

舞台芸術学修のための劇場やスタジオ等の施設を備えた実習棟及び共同生活によるコミュニケーション力の向上や、反転授業における事前学修等のグループディスカッションを行う場としての学生寮を整備。

〔大学概要〕

学校名	芸術文化観光専門職大学
学長予定者	平田オリザ
開設場所	兵庫県豊岡市山王町7-52
設置学部／学科	芸術文化・観光学部／芸術文化・観光学科
開学時期	令和3（2021）年4月
定員	入学定員80名／収容定員320名

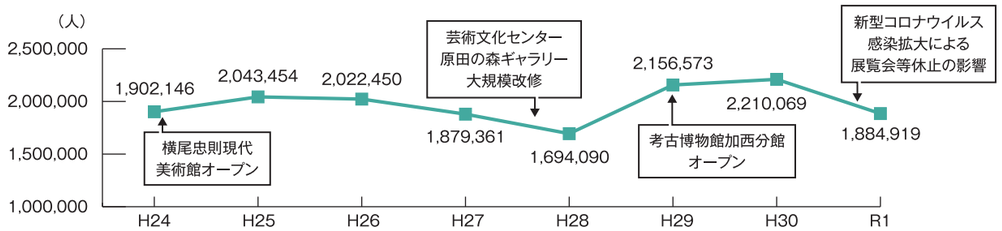
(2) 芸術文化の拠点機能を高める

■ 現　状

○ 本県には、全国的にもトップレベルと評価されている拠点的な施設から、専門性が高い個性的な施設、地域に密着した施設など、公立・民間立を問わず、数多くの芸術文化拠点が整備されている。また、協議会の設置やスタンプラリーの実施、舞台公演の共同制作など、施設間の連携も活発である。

○ 第2期ビジョンの期間中には、県立美術館王子分館や県立芸術文化センター、ピッコロシアターなどの大規模改修が行われたほか、個人や団体から寄贈を受けたコレクションを活用するため、新たな県立施設の開設や増設、特に既存施設の有効活用という観点から、機能強化や長寿命化、運営体制の見直しといった取組が進められた。

県立芸術文化施設入館者数の推移
（※芸術文化センター・尼崎青少年創造劇場・県立美術館・歴史博物館・考古博物館・横尾忠則現代美術館・兵庫陶芸美術館の合計入館者数）



■ 課　題

○ 地域の文化拠点を支える人材や資金の不足が懸念されており、各施設に寄せられる多様な住民ニーズに対して十分に応えることができないおそれが出てきている。

○ 災害時に芸術文化施設間での連携と情報共有を図ることの重要性が浮き彫りになったことから、ICT化への取組など、その体制の整備を充実する必要がある。

○ 芸術文化観光専門職大学の開設や県庁周辺地域の再整備にあわせた県民会館の建替など、新たな芸術文化拠点整備の効果を最大限に生かす取組が求められる。

■ 展開方向

○ 県内の各芸術文化施設が、魅力的な公演・展示を行うとともに、交流の場となる参加型のイベントを開催するなど魅力づくりに取り組み、芸術文化の創造・発信拠点としての機能を一層発揮する。また、国庫補助金や交付金など有利な財政措置を活用しつつ、既存の文化拠点の機能強化・長寿命化を計画的に実施する。あわせて、各施設がその使命や役割を明確化し、それに基づいた事業展開を行うよう助言する。

○ 県内外の芸術文化施設・団体とのネットワークをさらに拡充し、情報発信力の強化とともに、事業企画や人材育成等についても連携を進める。

○ 新たな芸術文化拠点整備に際しては、周囲にある既存の拠点施設との十分な連携を図るとともに、地域が一体となって支える機運と体制を作り出す。

■ 主な取組

①芸術文化事業の企画・実施

・ 美術館・博物館等における魅力的な企画展・特別展等の開催
・ ホール・劇場等における魅力的な公演の実施

②県内外の施設とのネットワークの拡充による利活用の促進

・ 公立文化施設協議会をはじめとする協議会等のネットワーク組織の運営
・ 複数施設が連携した共同企画による公演・展覧会の開催や人材育成の取組
・ スタンプラリー事業の実施など複数施設が連携した情報発信

③芸術文化施設の活用、適切な維持・保全

・ 有利な地方財政措置を活用した機能強化・長寿命化の取組
・ 指定管理者制度やネーミングライツを活用した財源の確保
・ 美術館等におけるコレクション寄贈受入体制の整備

④新たな芸術文化拠点整備における地域との連携

・ 芸術文化観光専門職大学など新たな拠点施設と既存の拠点施設との十分な連携の確保
・ 地域が一体となって支える機運づくり
・ 近代茶室建築を代表する木津宗泉設計茶室の移転整備
・ 地域の芸術文化の核としての新県民会館のあり方の検討

column　兵庫が誇る芸術文化拠点

兵庫県は阪神・淡路大震災以後、財政的に苦しい中でも、兵庫県立美術館や県立芸術文化センター、兵庫陶芸美術館など、さまざまな拠点施設の整備に取り組んできました。

この結果、多くの施設が全国的・世界的にも高い評価を得ています。

○劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業に2館が採択

我が国のトップレベルの劇場・音楽堂等を支援する（独法）日本芸術文化振興会の劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業に「県立芸術文化センター」と「県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）」の2館が採択されています。同事業に採択されたホールは全国で16館のみ、うち同一設置者の劇場が複数選ばれているのは東京都と兵庫県のみです。

県立芸術文化センター

県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）

○横尾忠則現代美術館がニューヨーク・タイムス（電子版）で紹介

ニューヨーク・タイムスの神戸特集において、「神戸の美術館なら、まず最初に横尾忠則現代美術館に行こう」と紹介されました。また、世界的に著名なトラベルガイドである「ミシュラン・グリーンガイド」においても一つ星を獲得するなど、外国人観光客にも注目される施設となっています。

横尾忠則現代美術館

○県立美術館第2展示棟（Ando Gallery）の増築

阪神・淡路大震災からの文化の復興のシンボルとして、2002（平成14）年、神戸東部新都心に開館。安藤忠雄氏によって設計された建物は、延床面積約28,000㎡という西日本最大級の規模です。2019（令和元）年には第2展示棟（Ando Gallery）を増築するとともに、安藤忠雄氏がデザインしたオブジェ『青りんご』を設置するなど、さらに魅力を増しています。

兵庫県立美術館第2展示棟（Ando Gallery）

屋外オブジェ『青りんご』

○兵庫陶芸美術館による地域密着の取組

全県的な陶芸文化の振興とともに陶磁器を通した人々の交流を深めることを目的に、2005（平成17）年に開館。美術館としての機能はもちろん、地域との交流を重視した運営体制・事業内容となっており、地域住民・団体と連携して「陶器まつり」「最古の登窯復元」など関連イベントの開催や、バス等公共交通機関の確保などを続けています。兵庫陶芸美術館も「ミシュラン・グリーンガイド」に掲載されました。

兵庫陶芸美術館

(3) 芸術文化の発信力を強化する

■ 現　状

○ 本県の芸術文化を県内外へ発信するため、各美術館・博物館、ホール・劇場等では、全国的・国際的にも評価される質の高い事業を展開しているほか、ホームページのスマートフォン対応や、各種広報誌等の発行による情報発信に取り組んでいる。

○ 第2期ビジョンの期間中には、東京オリンピック・パラリンピック開催等の機会を捉え、本県の分厚い文化力を県内外へ情報発信する「ひょうごの文化発信リーディングプログラム支援事業」や「beyond2020プログラム認証事業」のほか、関西広域連合等と連携した情報発信の取組も進んだ。また、淡路人形浄瑠璃パリ公演やフランス・スーラージュ美術館での「具体、空間と時間」展の開催、ICOM京都大会における県立博物館施設のPR実施など、様々な機会を捉えての県の文化力発信にも取り組んだ。

■ 課　題

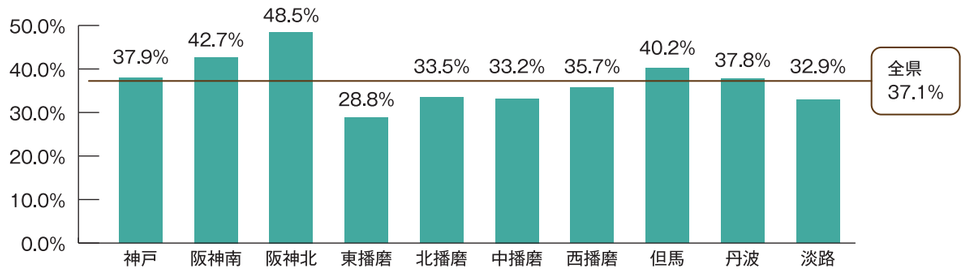
○ 動画配信などICT技術を活用した情報発信について、その量は一気に増加しているものの、情報を一元的に整理する仕組みの整備等が十分ではない。また、ICT活用などの新たな情報発信・情報受信になじみの薄い層がまだ多いのも現状である。

○ 「住んでいる市・町で、芸術文化に接する機会があると思う人の割合」が50%を切るとともに、地域間の格差も依然として大きいなど、芸術文化に関する情報が必ずしも必要な人へ届いていない現状がある。

○ 市町ホールにおいては、経験豊富な専門職員の退職や非正規職員の増加、指定管理者の頻繁な交代などの理由により、自主公演やアウトリーチ活動などにおいて、企画力・実行力に課題のあるホールの増加も課題となっている。

○ コロナ禍の中、安全と芸術の両立が課題となっているほか、海外との交流が制限を受けており、国際的な芸術文化交流や情報発信が困難な状況にある。また、施設に来ようと思っても仕事や家庭の状況等により、来ることができない方も増えている。

住んでいる市・町で、芸術文化に接する機会があると思う人の割合



【出典:兵庫県「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査(令和2年度)】

■ 展開方向

○ ICT等の活用により、効果的・効率的に情報発信を進めるとともに、潜在的なマーケットを掘り起こす。その際には、実際に時間や空間を共有するという芸術文化の本質や、ゆったりとした時間や場所の確保、ICTになじみの薄い層への発信、アーティストのやりがいなどについても、十分に留意する。

○ 芸術文化活動・鑑賞機会等に関する地域偏在を解消するため、県立ピッコロ劇団や兵庫芸術文化センター管弦楽団による県内市町ホールでの公演を引き続き実施するほか、ICTを活用した公演等の動画配信など、市町ホールの企画力向上のための取組や地域内での情報発信を進める。

○ 東京オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲームズ関西2021、大阪・関西万博等の大規模な国際的イベントの開催を契機に、引き続き本県の芸術文化を国内外へ発信する取組を着実に進める。

■ 主な取組

①ICT等を活用した多彩な芸術文化情報の発信等

- ホームページ、SNSなど、媒体の特性を考慮した情報発信
- インターネット上でのバーチャルミュージアム(兵庫文学館、ひょうご歴史ステーション等)の運営
- 芸術文化施設が開催する講習会やセミナーなどを、オンラインを通じて配信
- つながる芸術文化プロジェクト等の若い人の能力や感性を生かした配信事業の支援
- 県芸術奨励賞受賞者等の動画を制作・配信するアーティストバンク構築事業
- 青少年リモートレッスン人材育成事業による専門的なレッスンを受ける機会の提供

②芸術文化の活動・鑑賞機会等に関する地域偏在の解消

- 市町ホール活用支援事業等による市町ホールの企画力向上のための取組
- 県立ピッコロ劇団や兵庫芸術文化センター管弦楽団による県内ホールでの公演
- ホームページ、広報誌等による地域に向けた積極的な芸術文化情報の発信

③大規模イベントを契機とした国際的な芸術文化活動の展開・発信

- 県立芸術文化センターの芸術監督プロデュースオペラ等、兵庫の文化力を生かした国際的な芸術文化活動の実施
- ひょうごの文化発信リーディングプログラム支援事業の推進
- 芸術文化施設のイベント情報、展示説明等の多言語による情報発信の充実

column　県立芸術文化センターにおける芸術監督プロデュースオペラ

佐渡裕芸術監督企画によるプロデュースオペラは、兵庫発のオペラプロジェクトとして新しいオペラファンを開拓し、全国的にも異例のロングラン公演を定着させました。

親しみやすい演目選びや低価格に抑えた入場料でオペラファンの裾野の拡大に努めるとともに、国内外第一級のクリエイティブスタッフと出演陣で世界にも通じるハイレベルなクオリティを実現。前夜祭などのプレイベントで、地域の賑わいづくりにも貢献しています。

開館した平成17年の「ヘンゼルとグレーテル」から令和元年の「オン・ザ・タウン」まで15作品153公演。計276,391人の方に本格的なオペラを楽しんで頂きました。

ヘンゼルとグレーテル(H17)

こうもり(H23)

トスカ(H24)

椿姫(H27)

フィガロの結婚(H29)

オン・ザ・タウン(R元)